

乗って元気になる車を

弘大とマツダが共同研究講座を開設



岩木健診ビッグデータを研究解析

運転支援技術開発へ

弘前大学とマツダ（本社広島府中町）は、人生を豊かにする車づくりにつなげるための共同研究講座「移動体験・Well-being（ウェルビーイング、心身ともに良好な状態）研究講座」を開設した。共同研究講座で自動車メーカーの参画は初となり、10日に同大で講座設置開式が開かれた。同大が中心となつて取り組む大規模な住民合同健診「岩木健康増進プロジェクト」の20年にも及ぶ健康ビッグデータの研究解析を進め、一人ひとりに寄り添った新たな運転支援技術の開発を目指す。

（稲葉智絵）

同社はこれまで、ドライに加え、事故を未然に防ぐための安全運転のサポートのため、誤発進防止機能、低速走行時に人や車との衝突を防ぐ自動ブレーキ、前後方接近車両検知などのシステムを開発し、車に搭載してきた。近年は運転手の体調悪化や居眠りで事故の恐れがある場合に、車を自動で路肩などに停止させる「ドライバー異常時対応システム」を開発。「優れた環境・安全性」を追求した技術開発を進めている。今年度初めて参画した岩木健診では、運転時の注意力や予測判断力、空間認知能力などの計測、アンケートを実施した。

共同研究講座では、社会環境、生活習慣といった受診者の背景も踏まえながら、同社が計測した結果と他の健診データを分析して

共同研究講座の看板を手にする福田学長（左から2人目）と今田執行役員（同3人目）ら

いく。同社担当者は「運転を不安に思っている人たちがいる。緊急性が高くない段階でも運転をサポートする技術開発につなげていきたい」とした。

講座設置開式は弘前大医学部で開かれ、福田眞作学長が「地域では車が欠かせない。運転によって認知機能が維持できていることなどを証明してもらいたい」、同大大学院の石橋恭之医学研究科長が「（共同研究講座では）これまでメタボのような内科疾患に関連した研究が多かった。（マツダの参画で）より高度で日常生活に密接した研究に加え、ロコモティブシンドローム（運動器症候群）の予防につながる」とそれぞれ期待を寄せた。

マツダの今田道宏執行役員は岩木健診の蓄積された多項目のビッグデータを「世界に類を見ないデータと評価。企業理念である『走る歓びを高め、生きる喜びにつなげていく』を踏まえ、『個人差、経年変化を理解することが重要。緊急時に運転を手助けする技術にとどまらず、乗ることでより元気になる車づくりを目指したい』と意欲を示した。式ではあいさつに先立ち、今田執行役員が、自動車の大量生産に必要な認証「型式指定」を巡る不正問題について陳謝し、再発防止、信頼回復に努めるとした。